
教養科目におけるアクティブラーニングを考える

| | |
|-------|----------------|
| 研究代表者 | 上垣 豊（法学部教授） |
| 共同研究者 | 田口 律男（経済学部教授） |
| | 小長谷 大介（経営学部教授） |
| | 谷垣 岳人（政策学部准教授） |
| | 秋葉 昌樹（文学部教授） |
| | 東山 薫（経済学部准教授） |
| | 竹内 綱史（経営学部准教授） |
| | 入谷 秀一（文学部講師） |
| | 中野 寛之（法学部准教授） |

本プロジェクトでは、アクティブラーニングの理論と実践を批判的に学び、龍谷大学深草学舎・教養科目、とくに講義科目での活用方法を具体的検討することにした。具体的な取り組みとしては以下のことを掲げた。

- 1)学外から講師を招き、教養教育におけるアクティブラーニングをテーマに公開研究会を開催する。
- 2)アクティブラーニングに関する文献を集め、集団で批判的に検討する。
- 3)専攻科目、教養科目を問わず、深草学舎の講義科目の中からアクティブラーニングを行っている教員にインタビューする。あるいは研究会を開いて報告してもらう。
- 4)PJメンバーが中心となってアクティブラーニングの実践報告会を開催する。

到達目標は次のように定めた。

- 1)アクティブラーニングの定義を明確にする。
- 2)成功例と失敗例を列挙し、アクティブラーニングの成功の秘訣を学ぶ。
- 3)大人数科目で、どのようにアクティブラーニングを導入すればよいのか、検討する。
- 4)専門分野ごとの違いを明らかにする。
- 5)教養科目でのアクティブラーニング導入の意義を明らかにする。
- 6)アクティブラーニングの教育効果を測る尺度、方法を検討する。

今年度は10月31日に香川大学の大学教育基盤センターに所属する佐藤慶太先生を講師として招き、公開研究会を開催した。佐藤先生には到達目標の1)から6)に関わって、ご報告いただいた。報告の概要は別記のとおりである。

また、2019年2月27日には本学の秋葉昌樹先生に「教育学のすすめ」と「現代社会と教育」での実践報告を行ってもらい、香川大学の佐藤先生にコメントいただいた。教養科目の教育学の授業にグループ学習を取り入れたもので、大変興味深いものであった。

今年度の取り組みを通じて、アクティブラーニングを教養科目の大人数科目でも導入する意義は十分あるが、相当な労力を要すこと、および専門分野別の違いがかなり大きいと感じられた。また、ほぼすべての課題に取り組んでみたが、内容が豊富でかつ多岐にわたるため、十分に集団的な検討を行うことができなかった。今年度の佐藤先生の報告と秋葉先生の実践報告を学び直すことを含め、来年度も引き続き、同様のテーマでFDに取り組んでいきたい。

下記は、10月31日の佐藤先生の報告と質疑応答の要旨である。

佐藤慶太先生の報告

香川大学の大学教育基盤センターに所属しています佐藤です。私はカントの研究者で、哲学を教えることができると同時に大学教育に関心があるということでこのセンターにおりまして、センターでFD講師の仕事を担当することもあります。今日は、大学教育の中でアクティブラーニングを導入する意義、大人数講義でアクティブラーニングを導入する意義、経験談、特に失敗談、そして効果の測定の仕方についてお話しします。四国には、SPODというFDのネットワークがあり、我々のFD業務をサポートしてくれる体制が整っています。今日の話は、自分の授業実践に基づきますが、SPODから提供された教材の内容やSPODで私が学んだことを踏まえています。

【大学教育、とくに大人数講義でアクティブラーニングを導入する意義】

アクティブラーニングとは、中教審答申の定義では、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」となっています。もうひとつ引用しますと、溝上慎一氏は『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』で「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと」と定義しています。〈教える〉から〈学ぶ〉への転換が強調され、この流れの中でアクティブラーニングが注目されてきました。その必要性について、文科省は、社会が複雑化した時代に生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材を育てるために能動的学習が必要になっている、と説明しています。一方、溝上氏は、グループで話し合う力がついたということは副次的なことで、検索型の知識基盤社会が到来するので、それに対して情報知識リテラシーをきちんと身につけさせなければならない、それは一方的な講義では身につかない、と述べています。

アクティブラーニングの必要性に関して私が納得できるのは、徳島大学の山口裕之氏の考え方です〔『コピペと言われたいレポートの書き方教室』〕。山口氏は、レポートの書き方を教える際に、「根拠を示せ、反対意見を挙げよ、具体的な結論を示せ」と強調するが、これは、単にレポートを書くためだけではなく大学は民主主義社会を担う市民を育成する砦だと信じているからだ、と言っています。これはアクティブラーニングが必要である理由の説明にもなると思います。

アクティブラーニングが大学に浸透していったのは、高等教育が大衆化して、ユニバーサル段階に入ったからです。2018年のデータをみると、2017年の段階で大学短大の進学率が57.3%になっています。様々な層の学生が入ってきて、教員が話しているだけで興味を持ってくれる学生が減りました。香川大学の葛城浩一氏が某大学で学生にインタビューしています〔「ボーダーフリー大学が直面する教育上の困難」『香川大学教育研究』12号所収〕。それによると、90分ずっと電話していた、イヤフォンをずっとつけていた、PSPをいじっていた、大音量で音楽を流していた、漫画を読んでいた、椅子を全部倒して横になって寝ていた、こういうようなことが起こっています。

一方で、京大、阪大、大阪外大などの学生を対象とした、95年のアンケート調査——これは、さきほどの溝上氏の著作で紹介されているものですが——でも、「自分の世界に浸りこむだけではなく学生のための講義をして欲しい」、「ひたすら先生がしゃべるだけお経みたいな講義はいや、みんなに分かる言葉遣いをして欲しい」、「もっと学生の反応を見ながら講義をして欲しい、基礎的な用語については解説して使ってほしい」などとあります。レベルの高い大学で、しかもかなり昔から、学生は一方的な授業にある程度不満を持っていたということが分かります。

大人数の授業は基礎知識の伝授がメインなのだから、アクティブラーニングは必ずしも要らないのではないかと、という意見もあるでしょう。私はそれでも講義の方でやった方がいいと考えています。講義でも自分の考えを表現する訓練を積んでいないと、その後の演習への参加がスムーズにできないということが、その一つの理由です。近年、初年次ゼミでアカデミックスキルを教えることが一般化していますが、それをたびたび活用するカリキュラムの設計になっていないと意味がありません。講義の中でもその都度思い出すようなポイントがないといけません。講義の中でもその都度思い出すようなポイントがないといけません。講義の中でもその都度思い出すようなポイントがないといけません。

もう一つ理由をあげましょう。アメリカの事例ですが、スティーブン・レビの『大学教員のためのルーブリック入門』が一種の教育格差の問題を指摘しています。「ここではマ

イノリティ第一世代、家庭内で初めて大学に進学するような学生の多くが、学問の世界で使われているような英語が話せないという事実に触れておきたい。かつて多くの学生は大学で教育を受けた家庭の出身であり、そこでは学術英語が使われていた。しかし、今の教員が日常的に学問的な会話で使っている用語が外国語、もしくは風変わりな方言にしか聞こえないような学生といかにコミュニケーションを取るかを教員は学ばなければならない」。日本でも事情はそれほど変わらないと思います。いろいろなレベルの学生がいる中で、彼らの理解を確かめるためには、講義でも、どこがわからないのかを確認するやり取りが最低限必要です。ここで双方向でのやり取りが必然的に求められます。要するに、教育格差の解消のために、アクティブラーニングが求められるといえます。また、家庭内で初めて大学に進学するような学生は、言われたことを覚えてテストで良い点をとってほしいと思いがちで、彼らには、考えるということが学問の本質であることがなかなか伝わらない。それを分かってもらうためには、学生が意見を出す場を設定しないといけないと思います。

【授業実践例の紹介】

ここからは実践事例についてお話しします。香川大学に「人生とキャリア」という必修科目があります。私もそれを一個担当し、「幸福とは何か」、「将来を想像することにどういう意味があるか」などをテーマにしています。受講生は最大200人くらいで、いろいろな学部の学生が受講します。この授業では、なるべくいろいろな学部生を混ぜて、1チーム4、5人単位で最大48チームをつくって、ほぼ毎回グループワークを組み込みます。はじめに座席を決めておくのが重要です。

グループワークの中で、特に簡単にできるのは「ラウンドロビン」です。〔1〕まず、教員がクラス全体に対して質問を提示します。その中で記録する人を決めて、誰から始めるか、何周、何分するかを指示します。〔2〕それから順番に意見を出させて、思いつくことをどんどん言わせる。批判などはしないでとりあえずみんなが意見を出せるようにします。記録者はグループ内で出た意見を発表する。〔3〕最後に教員がまとめをします。これは話す練習にとともなるし、例えばある問題について当初どのようなイメージを持っていたか、それが議論の結果、どのように変わったかを確認するために活用できます。学生は、授業でいきなりマイクを向けるとしーんとして答えてくれませんが、グループで話し合った内容を発表するとなると、ハードルが下がるのか、結構話してくれます。

もう一つは「シンク、ペア&シェア」です。〔1〕まずクラス全体に質問を提示し、各自一人で考える時間をとる。例えば4人組ならば隣の人とまず話して、各自の考えを共有します。〔2〕次に、その2人組でどういう話が出たかをグループで共有する。〔3〕最後にそのグループの意見を教室でシェアする。自分の意見を言うことに抵抗がある学生でも、二人ならば話せるし、準備をすればグループの中で話せます。少しずつハードルを上げて、最後は先生の前でも話せるようになります。

この授業は当初、「幸福論」というタイトルでやっていたとして、最後の3回で「私の幸福」をテーマとして、幸福ということを絡めて大学4年間どう過ごすか、全員で発表会をするようにしました。200人ぐらいの場合はTA2名の補助つける必要があります。200人を三つの教室に分けます。私のいない教室は2人TAに見てもらいます。最後の3回のうち1回目は、グループ(4~5名)を二つのまとまりにして、紙媒体のスライド資料を使ってグループ内で発表します。グループは8~9人ですから、1人が7~8人を聴衆にして資料を配りプレゼンします。発表する人数が多いですから、発表時間を7分にして、シビアに区切る必要がありました。発表後、グループの中で一番良かったものを投票で選びます。選ばれた学生がそれぞれの教室で8人くらいになります。選ばれた学生は、次の回で、教室の前でスライドを使って2回目の発表し、その他の学生は聴衆になって誰が一番良かったか投票します。各教室でベストワンになった学生3名が最後の回で全員の前で発表します。このプロセスのうち、2回目、3回目の投票では、「選ばれたときに発表するかどうか」とはじめに確認しておきます(やりたくない学生もいるので)。それで、ネット上で投票結果(選ばれた学生の学籍番号)を発表し、選ばれた学生には、教室の前での発表のときにUSBなどでデータを持ってきて下さい、という注意を与えます。これで大体うまくいきました。

今はクォーター制が一部導入されて「人生とキャリア」が8回の授業に変わったので、「想像力」にテーマを変えて、ジグソー学習などを取り入れています。最近の学生は新聞をあまり読まないし、それぞれの新聞の主張が異なることを知らない場合もあります。そこで、同じテーマを取り上げている新聞5紙の社説をグループの5人に配り、各自が別々の社説を要約、グループ内で共有して、意見交換をする、といったことをやったりしています。

この授業では、学生から「ディスカッションの前やレポート提出前は自分の出した答えに納得していたのに、いざ他の人の考えを聞くと似ているけど付け足しがあったり、あるいはまったく違っていたり、1つのテーマからこんなに多くの考えが出てくるのだと思うとこれからいろいろな事について、自分だけでなく様々な人と話してみたいと思いました」などの意見をもらいました。

次は「哲学の歩み」という教養の授業科目の事例を紹介します。基本的に講義中心の科目で受講生は100人ぐらいです。そのなかで、「サイレントダイアログ」という手法を使いました。ケイトトムソン『中学生からの対話する哲学教室』という本に、次のやり方が載っています。〔1〕議論するテーマを決めてワークシートを配布する。ワークシートの1stステージに自分の意見を書いて時間を見計らってワークシートを回収して混ぜます。

〔2〕次に、順番を変えて誰が書いたかわからなくなったワークシートを再び配布し、学生は1stに書いてある意見を読みそれに対する反論を2ndに書く。反論できない場合は、思いついたことを書くのもよい。また回収して配布する。〔3〕最後に学生が1st、2ndの人の意見と読み、1st、2ndの二人の対立について考えたことを3rdに書く。2ndが反論でない場合は二人の意見を読んで考えたことを書く。最後はワークシートを回収する。

私は、書いたあと後ろの学生に回すようにしました。シートを回収して、いくつかピックアップして次の時間に紹介してコメントしました。学生からは、「人それぞれ違う考え方を持っていて同じ立場でも異なる考え方でそこに行き着いたりしたことがわかったので、こういう風に意見を回すのは面白いと感じた」、「こんなにも考え方が違うのに双方を尊敬したり嫌悪したり人間は複雑で理解しがたいです」、「グループでの話し合い苦手で意見が言えないことがあるけれど、筆記なら自分の意見をちゃんと伝えることが出来ていい」という意見が出てきました。自分がどういうことを言われたか見たいという学生がいたこともあり、その場合は、1st、2nd、3rdの各欄にパスワードを書かせて、私にはパスワードと名前を書いたものを提出してもらい、それにもとづいて、該当するシートを探して、後でコピーを配布したこともあります。

もうひとつ紹介します。「フィッシュボウル」です。パークレイ+クロス+メジャーの『協同学習の技法』に載っていますが、次のような技法です。〔1〕まず学生の小さなグループ、3人から5人に輪になるように指示し、残りの学生はそのグループを囲む大きな輪を作るように指示する。内側の学生のみが話せる。外側の学生は観察者として内側で展開する話し合いの内容と流れについて気付いたことをメモする。〔2〕終わった後、学生全員で話し合う。内側の話し合いで取り上げた重要な点とか、気になった点とか、話し合いがグループの中でどういう風に進行したかについて取り上げる。観察者たちに、議論をうまくすすめるためには何が必要か考えさせる、というのがこのワークの狙いです。

私の場合は、「フィッシュボウル」を行う前の回に、論題を提示しました。ワークシートに「次の授業で前に出てきて議論してもいいですか」という質問を添えて、意見を回収しました。選択肢の中に「すごくやりたいわけではないけれど、してもいい」という項目をつけておきます。「してもいい」と書いている学生の中で、議論できそうな学生を選んで、次の回にディスカッションをする。選んだ学生が欠席の場合もありますから、5人の発表の場合は候補を10人ぐらい準備しておきます。

ディスカッションに参加した方の学生からは次のような意見が出ています。「自分の考えをまとめながら話すということがとても難しかった。他の人の考えを聞いてなるほどと思ったところや、突き詰めると面白いところが出てくるのが楽しかった」。「ディスカッションでは相手の意見を聞いてから瞬時にたくさんのことを頭で考え反応しなければならぬので、自分の意見にきちんとした根拠があることが必要になってくるのが気づきました」。聴いている学生からは、「細かくテーマを動かすことで発言が増え盛り上がるこ

とがわかった」などのコメントがありました。

次は、非常勤をしている香川県立保健医療大学での倫理学の授業の事例です。受講生は70人ぐらいです。6人1組で最大12グループぐらい作って毎回グループワークをしますが、そのなかで「ジグソー学習」を取り入れています。これは、次のようなワークです。

〔1〕グループ分けをし、課題を分割し分担可能にし、教材を一人一人に配布する。メンバーそれぞれが別の課題を受け取る。〔2〕次にカウンターパートグループ（同じ課題を受け取った生徒からなるグループ）を作ります。〔3〕ここで課題について理解を深めたうえで、元のグループにもどって、各自の課題についてグループのメンバーに説明をします。これが一連のプロセスになります。各自が責任を持って取り組まないと他の人に迷惑が掛かるので、積極的な学習を促すことができると言われています。

私はジグソー学習を、ロールズの正義論の授業で使いました。課題資料を3種類（A、B、C）用意して、まず、1班にA、2班にB、3班にC、…というように資料を配りました。（グループにつき、一種類の資料を配布したわけです）。各グループは6人構成です。まずグループで話し合っ、要点をまとめます。今度は各グループが2名ずつに分かれて、A、B、Cの資料を持ち寄る6名のグループに移ります。同じ資料を持っている学生はグループ内に二人しかいません。それで情報を全然持っていないほかのメンバーに説明しなければなりません。授業では、要点をまとめるシートが3種類つくっておきました。1個目のシートには、最初のグループで要点をまとめるために使います。残りのシートは、二つ目のグループに移った時に、他の人が説明するのをメモするために使います。ジグソー学習は、レポートの資料集めの分担などにも応用できます。かなり前ですが、初年次のゼミで、朝青龍引退についてレポートを書かせました。この事件を、五社ぐらいの新聞が社説で取り上げていました。5人のグループだったので、新聞社の担当を決めて、一人が1紙、グループメンバーのコピーをとり、どういう内容なのか説明できるよう準備することを宿題にしました。次の時間には5種類の社説が一つのグループに集まっていることになります。授業では、社説の要点説明をそれぞれがします。この後、レポート執筆の課題を出します。こうすると参考文献に5つの新聞社の社説を載せることが出来るので、一定の資料に基づいた意見を述べるレポートが書けます。

【アクティブラーニングの評価】

アクティブラーニングを評価する際の代表的手法として、ルーブリック評価についてお話しします。ルーブリック評価は、ある課題達成のポイントをいくつかの構成要素に分けて、要素ごとに評価基準を満たすレベルについて、詳細に説明したものです。縦軸に評価の観点、レポートならば主張と根拠があるか、資料収集はできているか、といった項目を書いていく。横軸はそれぞれの項目における典型的な段階を説明する。例えば、資料収集ならば、引用されている文献が3つ以上ある（A評価）・1つか2つ（B評価）・全然ない（C評価）など。ルーブリックは特に、学術的な用語の意味を学生に理解させるために非常に良いツールであると言われています。また、異なる人が評価しても同じ結果が得られますから、例えばオムニバス授業などで、担当者が話し合って作成すれば、評価のばらつきが是正されます。

京大の松下佳代氏が、徳島大工学部で卒業研究のプレゼンテーションで、ルーブリックを使った事例を紹介しています〔「新しい評価のパラダイム」『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』所収〕。中間発表を数回行う際に、ルーブリック的なレーダーチャートをつかっていますが、何回かやっっていくうちに、得点があがっていくだけでなく、教員と学生の評価のズレが少なくなっていくそうです。学生が、先生が求めている水準はこの辺であるということがわかってくるわけです。

ルーブリックについては、人間の活動のホリスティックな面を的確にとらえられない、はじめから目標を設定してしまうとクリエイティブなものが出にくくなるという批判もあります。それでも、初年次の段階で基礎的なことを教えるためには効果があると思います。

最後にグループ活動をさせる際に、内部で起こっていることを把握するための技法、「ピア評価」を紹介します。グループ内で学生相互に評価をさせる方法です。私も初年次のゼミでつかったことがあります。一種の談合が起こって、相互に最高点ばかりつけるグループが出たことがあり、困りました。この話を夏にある研修でしたら、先生しか見ないよ

うにしてウェブ上で提出させる形にしたらよいと言ってくれた先生がいました。

【アクティブラーニングの効果測定】

効果の測定ですが、香川大学が1年生対象にして実施している調査を紹介しします。香川大学の葛城浩一氏が、①授業での経験、②授業への取り組みの自己評価、③身についた力についての自己評価、について問うたアンケートをもとに、その相関を調べています〔「アクティブラーニング型授業は教育効果があるのか」『香川大学教育研究』15号所収〕。彼の分析によれば、アクティブラーニング型の授業に積極的に取り組むことと、社会の一員として責任ある態度、現代社会の問題についての知識理解、課題を見つけ解決方法を考える力の向上に相関があります。たとえば、コメントの活用およびグループワークに積極的に参加することと、社会の一員として責任ある態度、専門分野以外の幅広い知識、多角的なもの見方、大学での学びに必要な技能・態度、集団の一員として行動する力（の自己評価）との間に有意な相関があります。ただし、教員がコメントを返してもそれを読んで活かすような心構えが学生にあることが前提になるのかもしれない。

<質疑応答>

小長谷（経営学部）：私自身も教養科目の科学史という授業で、以前にアクティブラーニング的なことを取り入れたことがあります。結局自分が忙しくなって続けられなくなりました。佐藤先生の場合は、こういうタイプの授業を続けている動機付けとなっているのは、所属されているセンターでモデルケースを作らねばならない、そういう使命感があるからでしょうか。

佐藤先生：継続性の面ではあると思います。例えば、ある学習方法を教えてくださいと言われると、自分でやってもないこと話すのは気が引けますので、してみようと思うことになります。他方では、例えば、初年次の「人生とキャリア」という科目だと、同じ授業担当している人はほぼみんなグループワークをするのが当たり前になっています。一定の科目間での合意があるのが持続できる条件ではないかと思います。哲学という科目の特性もあるかと思えます。

小長谷：科目の適合性があって、アクティブラーニングが導入されやすい科目があるのではないかと思います。例えば、専門教育と教養教育科目だとか、理系と文系で科目適合性に違いがあり、教養教育だとやりやすいけれども、専門教育では卒業研究までにいろんな知識を求められる場合には、そんな余裕はないと思われれます。理工系であれば、力学だとか物理学だとか必ず1回生、2回生の時に、絶対学んでおかないことがあるので、とてもアクティブラーニングをしている余裕はないのではないかと思います。

佐藤先生：私もそういう風に思えます。哲学の授業だとある程度、何を教えるかは選択できるので可能です。経済学部の先生、資格系の科目の先生では、全部導入はできないと言う方もいます。ただし、そういう分野でもしている方がいて、たとえば医学部のある先生が、大規模なアクティブラーニングを取り入れています。事前学習の動画を自分で作り、それを事前に見ることを宿題にします。授業では、事前学習を前提にアクティブラーニングをさせます。これだと、知識の伝達をふまえてアクティブラーニング型授業ができます。反転授業などと最近言われています。

國重（経営学部）：学生にアクティブラーニングをする効果を事前に教えていますか。

佐藤先生：これにはこういう効果があるので取り組んでもらっています、とは私自身はあまり言っていないです。

國重：学生が大学で何を学ぶのか、高校までとどこが違うのか分からないで入ってきているので、私は、大学はこういう学びをするところだと、最初に念を押しています。

佐藤先生：大学入門ゼミという全学必修科目で、高校の学びと大学の学びはどう違うのかを説明することになっています。

小峯（経済学部）：経済学部では30クラスくらい分割して全員が履修する少人数の初年次教育があります。クラスを、1年後半などに学生に選ばせる段階もあります。その場合に、一定のキーワードを入れておくと、希望する学生の数が大きく変化します。例えば、グループ学習とか入れると結構人気が高く、レポート課題を課すというとなちまち人気は下がる。今、小学校でも中学校でもこのラーニングをすでに相当していると思えます。

それと同じことを大学でしているという安心感があるのか、さぼれるのかちょっと分かりません。お聞きしたいのは、アクティブラーニングと伝統的な、例えばレポートを最終的に書くとか論述試験を書くことにつながっているのでしょうか。

佐藤先生:私自身の経験では、レポートを書くことに関してはつながると思います。きちっと自分の問題を立てて、論証して結論を出す練習になるような仕方とみなすと話し合いをさせ、レポートを書くという点では、効果があるし、練習になるでしょう。論述と知識の定着についてはいろいろと研究があって、記憶の定着の点でも効果があると言われています。

國重:資料を見ると、学生には手書きで提出させているようですが、インターネットを使って提出させたほうが便利ではないでしょうか。

佐藤先生:授業時間内に書きたいという学生の希望が多かったため、手書きになっています。香川大学にもネット上でやりとりできるシステムはあります。アプリケーションを使ってメンバーの学生は何月何日までに意見をここに入れるようにと指示している先生もいます。

小峯先生:私の直感では手書きで書かせた方が定着する気がします。集計の手間を考えると圧倒的に入力させた方がいいので、どちらが良いのでしょうか。

佐藤先生:どちらがよいのか、逆に教えて頂きたい。

田口(経済学部):小中高でアクティブラーニングは盛んになっていて、大変優秀な進学校だと優秀な教員がアクティブラーニングをしているが、受験ばかりのところはそういう時間をできるだけ削除していく傾向があるように思います。小中高からずっとアクティブラーニング、主体的・対話的学習が取り入れられた中で、アクティブラーニングのリテラシーに長けた学生とそうではない学生が出てきているのでしょうか。

佐藤先生:印象の話になってしまいますが、アクティブラーニングとか話し合うこと自体ずっとやってきましたと書く学生は今のところあまりいません。

田口:アクティブラーニングは、実質は2020年度に小学校導入で、それから中学・高校となっています。もうすこし経ったら格差のような問題がもっと出てくるのかもしれない。もし、小中高と、そういう訓練・トレーニングを受けてきた学生が入ってきたら、大学でアクティブラーニングをする必要はあるのでしょうか。

佐藤先生:アクティブラーニングに慣れていたら、それを使ってどうするかが今度は考えられればいいかなと思います。ディスカッション能力が全員についているのだったら、例えば、話すことに慣れさせるところを飛ばして、本質的なところに入っていくことになると思います。する意味がなくなるのではなく、高度化していく方向でしていけるのではないかと。ただそんなに能力がついた人がどんどん増えてくるとは思えません。格差が出てくるかもしれません。

秋葉(文学部):資料の例でロールズの思想の源泉とありますが、ジグソー学習を取り入れる前であれば、もうすこし違うレベルのものも考えられるのか、それともジグソー学習を取り入れようが取り入れまいが扱う資料のレベル、質は変えないのでしょうか。

佐藤先生:内容的にはそんなに変わりません。私自身が話すのではなく、倫理学の参考書を使って文章化しているので、質が変わった資料になっていますが、内容的には同じレベルの話をしていて、特にジグソー学習をしているので易しくしたとか難しくしたわけではありません。

秋葉:先程、マイノリティ第一世代の学生たちにとってみると、かつての一斉講義型の方法は知らないはずですが。彼らにとってはアクティブラーニングは最初から大学の学びになっていて、アクティブラーニングならば、ついてこれるということですか。

佐藤先生:そういう風になったらいいと思っています。与えられている情報自体は一方的に話していた段階と同じかもしれないけど、どこが分からないかとかを言い合えるような環境を作れば、それを学んでいくプロセスが入るという仕方で、受け取り方が変わってくるのではないのでしょうか。

秋葉:教材の絶対量は変わらないと。

佐藤先生:ええ、そうです。ただ、[ジグソー学習の場合に]最後に共有する段階でかなりのものがそぎ落とされて貧弱な情報になってしまうという危険性があります。理想的

には今まで講義で話していた内容を文章化してそれを理解しやすいような環境で学生が受け取っていくってことにしたい。

秋葉:アクティブラーニングをする方が緊張されますか、それとも、リラックスしてやられていますか。

佐藤先生:私自身は一方向的に話しているだけだと、学生が分かっているのかと不安になってきます。例えば、ジグソー学習で学生が聞いているので、「こういうことじゃん」とか言って、「ああそうか」というやり取りを聞いていると、安心感があります。ただ、資料準備は講義と全然違うし、誰をどのグループにいれるとか、休んだ学生がいたら、このグループは何人になってしまうとか、そういう点での不安感があります。

以上